

中国・江南地方

岩 井 純

I. はじめに

中国江南地方（揚子江下流の南部）を訪れたのは2011年11月末から12月上旬にかけてのことであった。無錫・蘇州・西塘（嘉興市嘉善県）・烏鎮（嘉興市桐郷市）・紹興・杭州・楓涇（上海市金山区）・上海などの江南地方を報告するに当たってはガイドの肖氏に負うところが多い。

到着したのは上海浦東国際空港（出発は成田）で、約3時間半のフライトであった。上海には空港が2箇所ある。西にある上海虹橋国際空港は浦東空港よりも小さく、浦東空港が開港してからは国内線専用空港（2002年10月以降）になっていた。現在はソウル（金浦）・東京（羽田）と結んでいる。浦東空港は1999年9月にオープンした。総面積は40平方キロ、滑走路は現在の3本から将来的には5本にする計画である。

II. 上 海

上海の人口は2000万を超えている。ガイドによると、中国で人口が1番多いのは重慶で、3000万を越えるという。市全域の人口では重慶が中国最大であるが、重慶の市域は広大（8万2000平方キロ）で北海道ほどの広さがあり、市域に多くの農村部を抱えている。都市的地域の人口は550万ほどであろう。都市的地域の人口で比較するならば、1位が上海、2位が北京となり、重慶は7位ぐらいに位置づけられる。

浦東空港駅と龍陽路駅（上海市郊外）を結ぶリニアモーターカーの高架軌道があり、約30キロを7分間で走っている。最高時速は430km、2002年12月、商業用としては上海が世界で初めてリニアモーターカーの営業を開始した。

市内のマンションは1坪あたり160万円と非常に高い。借りる場合は、3坪（10m²）が1万5000円ほどらしい。土地は国有であるからマンションを購入する場合は、建物部分と土地の使用権（70年）を買うことになる。土地使用権を国家から買う場合、用途によって使用期限が異なる。住宅用地は70年、工業用地は50年、商業・観光・娯楽用地は40年である。

3月11日（2011年）の東日本大震災の影響もあって日本人観光客が激減した。日本人客が減少したため、上海の旅行社の半分ほどが倒産したという。上海の旅行社は今300ほどであるが、3.11の前は600ほどあったという。小さな業者では日本人観光客しか扱わないところもあり、そのような業者が打撃を受けた。大きい業者が生き残ったのはアメリカ人やヨーロッパ人観光客も扱っているからである。

車の青いナンバープレートの最初に「滬（こ）」の簡体字が表示されている。「滬」は上海の略称である。日本では車を購入する場合、車と登録料はセットになっているが、中国では車の登録に多額の金がかかるという。上海の場合、普通のナンバープレートを入手するだけで70

万円ほどするとのこと。上海ではナンバープレートを、毎月1回行うオークションでしか購入できないらしい。その最低落札価額が70万円ほどになる。6・8・9は中国人にとって縁起が良いとされる数字（ラッキーナンバー）だそうで、6・8・9などの数字が並んだナンバープレートを手に入れようとすると、より高額になるという。車だけの値段は120万～130万円とのこと。肖氏の話では、上海では1日に8000人が車を買う状況で、増加が急激であるために購入を控えさせる意図で高額登録料を設定するのだという。

「黄浦江ナイトクルーズ」では新旧の上海を見ることができる。黄浦江（上海最大の川で、揚子江の支流）の両側に分かれて古い上海と新しい上海がある。クルーズ船からは上海テレビ塔（東方明珠電視塔）がよく見える。浦東新区陸家嘴（りくかし）金融貿易区に位置する上海テレビ塔は高さ467.9m、1994年の完成であるから17年の歴史がある。上海は黄浦江の東側を浦東（プートン）、西側を浦西（プーシー）と称し、二つに分けられる。黄浦江の下にはいくつかのトンネルがあり、いくつかの橋も架かっている。昔はフェリー（渡し船）で車も自転車も人も渡っていた。トンネルや橋は、自転車や人の通行はできないらしく、今も渡し船が利用されている。

古い上海は外灘（ワイタン）〈バンドともいう〉である。この一帯はかつての租界地区である。租界とは、一般行政権を掌握した外国人居留地のことで、中国の領土・主権が侵害された地域である。外灘は最初にイギリスの租界（1845年）となり、のちにイギリス・アメリカの共同租界になったところでヨーロッパ風の建物がある。上海租界は、一国が管轄する専管租界である「フランス租界」と複数国による「共同租界」の総称である。共同租界はイギリス・アメリカ・日本など数カ国が管理していた。上海に「日本租界」はないが、「共同租界」のうち、日本人が多く住んでいた地域（上海北部の虹口地区）を「日本租界」と呼ぶことがある。新しい上海は20年ほど前から形成された。浦東は高層の建物が林立しているが、20年前には畑しかないところであった。そのようなところを鄧小平が発展させたのだという。浦東新区には中国1の超高層ビル上海環球金融中心（上海ワールドフィナンシャルセンター、上海ヒルズ）がある。高さは492m（地上101階、地下3階）。このビルの事業主体は上海環球金融中心有限公司であるが、森ビル等も出資している。上海ヒルズは2008年に竣工し、営業を開始した。2008年に着工し、建設中の上海中心（上海タワー）は3年後の2014年に完成予定である。高さ632m、128階の上海中心はアメリカのゲンスラー社の設計による。上海中心が完成すると浦東新区陸家嘴金融貿易区には隣接して三つの超高層ビルが並ぶことになる。すでにここには、1988年に完成した金茂大廈（ジンマオタワー、420.5m、88階）がある。

閔行（びんこう）区にある虹橋鎮は、日本人駐在員の多いところだという。閔行区は上海市西南部に位置し、長寧区（虹橋空港がある）に隣接している。日本人は上海に8万人が居住していると言われ、日本人が多く住む地域には日系幼稚園がいくつかある。上海日本人学校は虹橋校（閔行区）と浦東校（浦東新区）がある。上海には世界初の日本人学校高等部（浦東新区）ができ、2011年4月16日に入学式・開校式を行った。日本領事館は虹橋経済開発区にあり、虹橋経済開発区は長寧区の西部に位置している。

上海展覽センターは市内中心部（静安区延安西路）にある。1955年に「中ソ友好記念会館」として建てられた建物で、中国風ではなく、典型的なスターリン様式の建物である。スターリン様式の建築物は、頂点に尖塔を取り付けた形式のものをいう。上海展覽センターは常設の大きな展示場である。骨董品は置いていない。展示してあるのは現代のもので、20～30年前に

つくられた民芸品（芸術品）であり、販売もしている。25年前に白檀でつくられた観音像がある。観音像は家族の健康・安全のお守りとしての意味がある。白檀の香りは20～30年間継続するという。上海には二つの中心地がある。人民広場周辺（黄浦区）と静安寺周辺（静安区）である。人民広場周辺には、北側に「上海市人民政府」が、南側には「上海博物館」があり、上海の中心商業区となっている。静安寺周辺も商業ビルやオフィスビルの並ぶ上海の代表的な繁華街になっており、上海在住の日本人が買物に来るといふ「久光」というデパートがある。地下は食料品売り場になっており、日本の食料品も売っている。ここでは「こしひかり」も売っているが、普通の中国人は食べないという。「こしひかり」はおいしいけれど、1kgが100元（1300円）もする。中国の米は1kgが10元なのである。「こしひかり」は正月の贈答品として用いられることがある。1952年、上海博物館は租界の競馬場跡地に中国古代博物館として開館（南京西路325号）した。1959年には河南南路へ移転し、1996年に現在地（人民大道201号）に移転した。上海博物館は青銅器のコレクションが有名であるが、陶磁器や書画のコレクションでも知られる。静安寺の近くには、かつてフランス租界があった。南京西路の両側には高級ホテルやブランド店・デパートが建ち並んでいる。南京西路は、かつての共同租界があったところにあると思われる（フランス租界と共同租界は隣接していた）。

田子坊（でんしぼう、たこぼう）は盧湾（ろわん）区にあり、東西南北を（東）思南路、（西）瑞金二路、（南）泰康路、（北）建国中路に囲まれた地域である（3平方キロほどの広さ）。40～50年前の古い上海を彷彿とさせる、昔ながらの石造りの建物が密集する住宅街を改修した観光ショッピングエリアである。田子坊は80年ほど前に形成された住宅団地で、上海独特の「石庫門」と言われる建築様式である。石庫門住宅は、壁を共有する長屋方式の集合住宅で、中洋折衷の建築方式と言えよう。一般的には2階建てで、レンガ造りとなっている。ショッピング街としての田子坊の歴史は新しく、せいぜい11年ほどでしかない。1999年に中国人画家の一人がここにアトリエを開き、続いて何人かの画家のアトリエ開設がなされ、その後画家のグループを顧客とするアートショップやカフェ、レストラン等が自然発生的に出現し、現在も拡張を続けている。

M50 ギャラリー街は中国現代アートの集積地で、普陀（ふだ）区莫干山路50号にある。M50は莫干山路50号の略称で、上海駅の西方にある。蘇州河のほとりに位置しており、紡績工場や倉庫の跡地を利用したものである。黄浦江の支流である蘇州河は呉淞江（ごしょうこう、ウーソンチアン）とも称する。M50は工場が外部へ移転して残っていた建物を10年ほど前から利用しており、2002年に創作パーク（芸術地区）として発足した。西洋風の絵の展示がなされており、水墨画の展示はほとんど見られない。

Ⅲ. 蘇州

蘇州は2500年前からの歴史があり、春秋時代（前770年から前403年までの約360年間）の呉の都であった。蘇州には留園、寒山寺、虎丘などがある。留園は500年前に、寒山寺は1500年前に、虎丘は2500年前に造られたという。虎丘は2500年前の墓である。呉王夫差の父、闔閭（こうりょ）を埋葬した場所だと言われている。大運河は隋の時代、1300年前に造られた。大運河は蘇州を一周しており、支流がたくさんあって網の目状になっている。昔は舟で移動した。虎丘まで徒歩1時間ほどの距離にある山塘街は運河の両側にちょうちんの装飾

があり、夜景が良い。虎丘は 36 m の小高い丘で、その上に高さ 47 m の斜塔が建っている。宋王朝の頃レンガで造られた 7 層八角形の塔は、地盤沈下により 400 年前から傾き始めたという。危なくて今は登ることができないが、夜になってライトアップされた姿は悪くない。

留園は約 500 年前、明代に造られた徐泰時の個人庭園「東園」に始まる。徐泰時は西園も造ったが、西園は寺院（戒幢律寺）となっている。清代になると庭園の持ち主は劉恕に代わり、清末には盛康の所有となった。江南地方は白い壁と黒い屋根に特徴がある。園内にある五峰仙館は重要な建物で、葬式や結婚式をここで行ったという。五峰仙館の前には築山があり、5 つの峰がある。最初の所有者である徐氏が太湖石で造ったもので、高さ 6 m あるその太湖石には冠雲峰という名前が付いている。留園の建物のなかには男性専用の部屋と女性専用の部屋とを分け、それぞれの部屋からの眺めに差を設けてあるものがある。男性の部屋からは良い景色が見えるのに、女性の部屋からは壁しか見えない。地面に鋪地（ほち）の見られるところがある。鋪地は小石などを敷き詰めて模様や絵を描いたもので、中国庭園のデザインの一つとなっている。ここにはコインと花の鋪地があり、花とコインを両足で踏むと金持ちになるという伝承がある。

寒山寺は 1500 年前、南北朝時代に造られたとされ、名利普明塔院（みょうりふみょうとういん）と呼ばれていたという。寒山寺の「寒山」は山の名前ではない。唐の時代の「寒山拾得（かんざんじつとく）」の「寒山」、人の名前である。寒山寺という現在の寺の名は唐代に寒山がこの寺に住んだという伝承にちなんでいる。唐代の 2 人の詩僧とされる寒山と拾得は、伝説上の人物と考えるべきであろう。寒山寺における夜半の鐘の音は古来有名であった。今は除夜の鐘の音を聞いて新年を迎える日本人観光客も多い。ここには唐の詩人張継が詠んだ「楓橋夜泊（ふうきょうやはく）」の詩碑がある。五重の塔「普明宝塔」もある。寒山寺の近くには京杭大運河の一部が流れている。隋の頃交通路として造られたこの運河は、魚や米を北京にまで運んだ。皇帝の奥さんは 1 人ではない。江南で選んだ女性を北京に連れて行くルートでもあった。寒山寺南門付近にある江村橋は 400 年ほど前、明の時代に造られたという。橋の下は舟が通れるように太鼓橋になっている。「楓橋夜泊」で知られる楓橋は寺院の西にあり、楓橋と江村橋を合わせて「江楓古橋」という。寒山寺は臨済宗の仏教寺院である。今は五重の塔である「普明宝塔」は、元は七重の塔として北宋（960～1127 年）の時代に建てられた。元代末期（14 世紀中頃）の戦争で壊され、壊されたまま 600 余年再建されることはなかった。高さ 42.2 m の普明宝塔が再建されたのは 1996 年のことで、その歴史は 16 年ほどでしかない。

昔から蘇州は刺繍とシルク（絹織物）が有名である。表と裏で図柄が異なる両面刺繍が知られており、蘭莉園刺繍研究所（蘇州市虎丘路）には表は虎の図だが裏がライオンである刺繍があった。展示されている毛沢東やダイアナの肖像は、絵のように見えるが絵ではなく刺繍である。絵画のように見える刺繍は細かい糸を使用しており、目が疲れるので 1 日に 4 時間しか作業ができないという。高価な刺繍は 100 万～200 万円する。昔は、額に入れた高価な刺繍を玄関に置くことで社会的地位を表していた。

上海と南京を結ぶ滬寧（こねい）高速鉄道は上海・南京間約 300 km を最短 73 分で走り、上海・蘇州間を 45 分で結んでいる。「滬」は上海の略称であり、「寧」は南京の略称である。南京は清朝のころ「江寧」と呼ばれていたことによる。滬寧高速鉄道は 2008 年 7 月 1 日に着工し、2010 年 7 月 1 日に営業を開始した。

蘇州では地下鉄の建設工事をしていて、また、蘇州のバス停は古い城門の形をしていることに特色がある。大運河の支流に沿って平江歴史地区があり、清代末期の建物がある。

運河にある階段は昔の船着場で、今は洗濯場となっている。運河沿いの家では今もマートン（馬桶）を使用しているという。マートンとは木製のポータブル・トイレのことである。ガイドの話ではマートンを運河で洗うということだが、筆者はその光景を目にすることは無かった。運河で衣服は洗っても、野菜を洗うことは無いらしい。

IV. 無錫

呉の都（2500年前）であった無錫は、3000年の歴史があるといわれる。3000年前は「有錫」であり、錫があったのだが、過度に採掘がなされたため「無錫」になったという。人口425万人の町であるが、中国では大都市ではなく中都市である。「無錫旅情」という25年ほど前の古い歌がある。中山大三郎が作詞・作曲し、尾形大作が歌った。1986年に発売された「無錫旅情」のレコードは130万枚以上を売り上げるヒットであった。鼈頭渚（げんとうしょ）公園には「演唱尾形大作」という碑が建っている。尾形大作は無錫市の名誉市民になっており、中山大三郎（島倉千代子の「人生いろいろ」や天童よしみの「珍島物語」などの作詞・作曲で知られる）も無錫の名誉市民になっているという。

太湖は中国では3番目の大きさで、琵琶湖の3.5倍の広さである。2250 km²の面積を有するが、浅く、平均水深2 m、最大でも48 m。深いところで8~10 mといったところだ。琵琶湖の方が深い。太湖では上海蟹（中国藻屑蟹）が取れる。上海蟹の産地としては蘇州市にある陽澄湖（ようちょうこ）も有名である。太湖は水産物が多く、シラウオも有名である。真珠も取れる。中国の真珠はほとんど淡水真珠である。養殖による淡水パールは粉にして、化粧品やサプリメントを作っている。太湖では上海蟹・シラウオ・真珠等の養殖をしているのである。太湖周辺の丘陵からは太湖石がとれたが、少なくなり、今は取れない。太湖石は浸食によって穴の多い複雑な形となった石灰岩である。

無錫三国城は16年ほど前に造られた映画村で、1994年に「三国演技」の撮影が行われた。映画のセットで人気のあるテーマパークで、国営である。池に船のセットがあり、拡大すると本物のように見える。孫権の宮殿のセットには86段の階段もある。三国城も鼈頭渚（げんとうしょ）公園も太湖の中に突き出た半島にある。鼈頭渚公園は三国城よりも広い。無錫の金持ちの別荘だったところが国立公園になったのだという。眺めの良い鹿頂（ろくちょう）山を含む鼈頭渚公園は、太湖に突き出す半島がスッポンの頭の形に似ているところから名づけられた（鼈はスッポンのことである）。太湖の中の島には、かつての毛沢東の別荘が今は迎賓館になって存在しているという。迎賓館には我々一般庶民は金を出しても泊れない。

清水源（無錫市浜湖区）という真珠店で話を聞く機会を得た。真珠の粉は健康を維持するのに用いられてきたとのことで、「救心」という薬に真珠の粉が使われているという。西太后は真珠の粉を飲み、また顔につけていたとのこと。太湖で取れる真珠の色には白・ピンク・黒・黄金色・茶色・紫などがある。薄い紫色の真珠は珍しく、日本にはないという。値段は白色の真珠と変わらない。茶色のパールは装飾品として人の肌の色にはマッチしにくいだが、投資目的で買う人がいるらしい。太湖ではカラス貝の一種から真珠を採っている。1つの貝から少ないときで8個、多いときで40個の真珠が取れるという。養殖に使用した貝は食用にすることは

なく、捨ててしまうとのこと。

V. 西塘鎮（嘉興市嘉善県）

西塘鎮は浙江省にある水郷で、運河の両側には 150 年前の家が並んでいる。1000 年の歴史があるという西塘鎮には塘東街や西街がある。清代に造られた瓦屋根の商店があり、瓦博物館、倪宅、西園がある。倪宅は塘東街に、瓦博物館や西園は西街にある。瓦博物館には清・明の瓦や戦国時代の瓦も展示されている。西園はこの地の富豪朱氏の邸宅で明代の建物であり、扇面書法芸術館や百印館があつて、扇子や印鑑が展示されている。今の中国ではサインで可とされるケースがほとんどで、印鑑を使用することはない。しかし、中国における印鑑の歴史は長い。南社陳列室もあり、南社に属した人の書いたものが残っている。「南社（なんしゃ）」は清末、革命を志向した文学団体で、1911 年の辛亥革命に関わった。「倪宅」は元上海市副市長の倪天増（1937～1992）の邸宅を記念館として公開したものである。元共産党優秀党員で、江沢民と一緒に写っている写真もある。西塘は 2006 年公開のアメリカ映画「ミッション・インポッシブル 3」のロケ地となったところである。

VI. 烏鎮（嘉興市桐郷市）

烏鎮も水路に沿って木造家屋があり、そこには高齢者が多く住んでいる。烏鎮は東柵景区と西柵景区に分かれている。舟が U ターンできるように掘り込んだ財神湾（元々は転船湾と呼ばれていた）の付近に漢方薬の香山堂があり、双橋がある。香山堂の建物は 130 年の歴史があるというが、今は営業していないらしい。双橋は二本の橋が固着した石橋で、橋には仕切りがあり、屋根が付いている。男は左を、女は右を通ることになっていたという。東柵景区には江南百床館（江南ベッド博物館）、造り酒屋、藍染め坊等がある。江南百床館には明・清代のベッドが展示されている。三白酒坊では地酒「三白酒」の製造・販売を行っており（伝統技術を用いた手作り）、そのアルコール度数は 55 度だという。明代には 20 軒以上あったという造り酒屋は、今は 1 軒だけになった。

VII. 杭 州

杭州は五代十国時代の呉越国の都であった。また、南宋の時代の首都でもある。少数民族のつくった金は漢族の南宋を攻撃し、岳飛（南宋の武将）は金に対して何度か勝利を取めたが、岳飛らの勢力拡大を恐れた宰相・秦檜に殺されてしまった。救国の英雄とされる岳飛の墓、岳王廟が西湖のほとりに建てられ、岳飛・岳雲父子の墓の前には、彼らを陥れた秦檜夫婦・張俊らが縄でつながれ正座させられている像が作られている。岳飛の評価が高いのに比べ、秦檜の評判は極めて悪い。

杭州の人口は 800 万人。ガソリンスタンドで軽油を求める車が道路にまで並んでいる。軽油不足なのである。

杭州は龍井（ロンジン）茶が有名で、龍井茶を生産している龍井村がある。龍井茶は上海地区でよく飲まれている緑茶である。

西湖はきれいであるが、大きくはない。しかも、浅い。自転車で湖畔を1時間ほどで一周できるという。2011年6月、世界遺産（世界文化遺産）として登録された。かつて、西湖と銭塘江は通じており、水門で銭塘江の水を調節していたという。鄧小平の肖像画が道端にある。かれは西湖の遊覧船に乗ったことがあり、西湖を見て賞賛したという。西湖天地は西湖の東湖畔に新しく開発されたレクリエーションで、レストランやカフェが立ち並んでいる。上海の新天地を開発した同じディベロッパーが開発しており、上海の新天地を意識して開発した観光地である。

西湖では「養殖」はしていない。「観光」用の湖なのである。元々あった雷峰塔は風化が原因で倒壊し、そのままにしておくに危険なので撤去したという。今はエレベーターのある雷峰塔がある。西湖には四つの島がある。孤山のみ自然の島で、後の三つ（三潭印月さんたんいんげつ・湖心亭・阮公墩げんこうとん）は人工の島であり、これらの三つの島は蓬莱三島とも言われる。「三潭印月」は三潭印月島の南側の湖中につくられた三つの石塔周辺の景観をいい、1元札の裏面の図案になっている。「潭」とは「深い」とか「淵」とかいう意味であるから、かつてはこの辺に三つの深い所があったのであろう。「印月」は石塔にともした灯火が小さな月のように見えることに由来する表現らしい。中国の紙幣の表面はすべて毛沢東の肖像画がデザインされており、裏面は中国各地の風景がデザインされている。1元札は西湖の風景であるが、100元札は人民大会堂正面玄関、20元札は桂林の漓江の風景、5元札には山東省泰山の風景が描かれている。

浙江省最大の川は銭塘江である。毎年8月に逆流が発生する。杭州湾に注いでいるこの川の河口はラップ状に開いた三角江になっている。逆流現象である海嘯（かいしょう）は河口が三角江になっているところで起きやすい。杭州湾は東シナ海に面した湾で杭州市は湾の奥にあり、嘉興市は湾の北岸に、紹興市は湾の南岸に位置している。

銭塘江に架かる銭塘江大橋は西湖の南、六和塔の付近に位置している。1階部分は高速鉄道、2階部分は自動車道路の二層構造になっている。六和塔は外から見ると13階に見えるが、実際は7階である。この塔は1000年の歴史を持つと言われ、洪水を起こす銭塘江を鎮めるために呉越王の銭弘俶が月輪山に970年（北宋の時代）に建てたという。北宋の時代には、塔の後ろに六和寺という寺があったとのこと。高さ約60mの六和塔は、レンガで造られた塔身を木造の外層で囲う形のレンガ木材構造で、七層八角の建物に六層の裳階が付いている。現存する塔身は1153年（南宋の頃）に修復されたもので、外層は清末に造られた。六和塔のある一帯は「六和塔文化公園」となっている。

河坊街（清河坊）は呉山の麓にあるショッピング街で、清代の建物を再現したものらしい。宋の時代に杭州の中心であった街並みをイメージして復元した。この街では中国服姿を見かける。特に目に付くのは、喫茶店の従業員の青い中国服である。呉山には2000年に竣工した観光用の楼閣「城隍閣」がある。かつてはここに道教寺院である呉山城隍廟があったらしい。城隍神（じょうこうしん）というのは、中国における都市を守護する神で、城壁や濠（ほり）を神格化したものである。祭神は時代・地域によってさまざまらしい。城隍閣の下に杭州歴史博物館がある。

「西湖の夜」は「東坡大世界」という劇場で見た。ここでは空中で回る芸・中国武術の乱舞・アクロバットそれに「千手観音」を見ることができる。「千手観音」は金色の衣装を着けた女性が一列に並び、交互に手を揺り動かして千の手を操るかのごとき姿を呈する踊りであ

る。

VIII. 紹 興

紹興は魯迅（周樹人）の故郷である。魯迅故居や紹興酒工場がある。紹興酒工場では製造過程を見、試飲した。紹興酒のアルコール度数は13度～15度で、日本酒と同じくらいである。江南地方と中国北方とは違う。北方では38度以上、高いのは60度のアルコール度の酒を飲む。

紹興ゆかりの人物としては魯迅のほかに周恩来や王羲之がいる。周恩来は江蘇省淮安の生まれだが、ここには「周恩来祖居」がある。周恩来祖居は周家代々の住居で、周恩来はここで6歳から13歳まで暮らしたという。ここは周恩来や周樹人に見られるように、「周」の姓が多い。書家として有名な王羲之（4世紀、東晋の頃の人）の本籍は現在の山東省臨沂市だが、会稽内史（会稽郡の長官）として赴任し、官を辞した後もこの地に留まった。会稽は現在の紹興市付近である。

多くのバス停には大きなビンが立っている。紹興酒の広告である。魚やエビの養殖池があり、街の入り口には大きな杯をさかさまにしたものが町のシンボルとして存在する。

人力三輪車で古い街を回ったが、一番古いところへは行かなかった。三輪自転車は2人乗りで、1人100元。革命家・思想家・小説家である魯迅（1881～1936）は紹興で生まれ、55歳で上海で死んだ。魯迅（本名周樹人。ペンネーム魯迅の「魯」は母親の姓）の祖父周福清（1838～1904）は北京で役人（内閣中書）をしていたが、1893年魯迅が13歳のとき、科挙に関する不正事件を起こした。それが発覚し、中書官を免ぜられ獄につながれた。父周伯宜（しゅうはくぎ 1861～1896）は1896年に病死した。一家は、事件のために莫大な金を費やさざるを得ず、豊かな生活から貧しい生活へと転落した。母親魯瑞（1858～1943）は纏足もやめ文字も読める女性であったが、彼女が魯迅の妻に選んだ朱安（1878～1947）はそうではなかった。魯迅が結婚の条件とした纏足をやめることと文字を学ぶことを朱安はしなかったのである。母親の強い勧めで不本意な結婚をし、魯迅は朱安とは有名無実の結婚生活を過すことになる。魯迅故居には「天井」がある。「天井」とは四方を家に囲まれた中庭のことである。

魯迅の生家から徒歩3分ほどのところに三味書屋がある。三味書屋は魯迅が12歳～17歳まで通っていた私塾で、塾の教師である寿懷鑑（1849～1930）の住居である。三味とは典経・歴史・芸術のことである。書屋は書齋の意味であろう。

紹興酒工場は郊外にある。紹興酒の原料はもち米で、それに酒薬（中国酒の醸造に用いる麴の一種で、漢方薬の成分を加えてつくる）や麦麴（小麦でつくった麴、すなわち小麦を蒸し、室の中にねかせてコウジカビを繁殖させたもの）を加える。水は鑑湖のものを使っている。紹興酒は黄酒（穀物を原料とし、麴の力で糖化・発酵させて造った醸造酒）の代表的な酒である。

内戦で共産党に敗れ、1949年から台湾に移った蒋介石（1887～1975）は浙江省寧波市奉化市溪口鎮の出身である。寧波出身の蒋介石は紹興酒を毎夜飲んでおり、台湾へ逃げるとき紹興酒の職人を連れて行ったという。台湾で造った紹興酒は紹興で造った紹興酒とは味が違っている。台湾の紹興酒は氷砂糖や梅干を入れて飲む。日本では台湾産の紹興酒が売られており、台湾での紹興酒の飲み方が日本に伝わった。本場の紹興酒は何も入れないでそのまま飲む。紹興

には紹興酒工場が5工場あるとのことだが、機械製造の工場が多い。筆者が訪れた「咸亨酒業有限公司」は国営工場で、100年の歴史があるという。紹興酒は子どもが生まれたときや結婚式のとき、祝い酒として飲む。

日本酒には賞味期限があるが、紹興酒は3年以上保存してから飲む。3年以上経過したものでないと紹興酒とは呼ばれない。日本酒（生酒以外）の賞味期限はほぼ1年と言われるが、これは賞味できなくなる期間ではなく風味が生かされる期間である。紹興酒には3年もの・5年もの・8年もの・10年もの・12年もの・15年もの・18年もの・20年ものなどがある。手作りの酒は陶器の壺に入れて保管されているが、年を経ると壺に入れてある酒の量が少なくなる。

中央市場へ行ったところ、簡易ベッドを持ち込んでそれぞれの売り場の奥で寝ている人が目に付いた。ちょうど昼休みだったのだ。紹興は鶏の料理が有名である。

IX. 楓涇（上海市金山区）

楓涇鎮には、水郷古鎮の街並みと金山農民画村がある。楓涇鎮は上海市域ではあっても農村地帯で、米の生産がなされている。楓涇三橋（清風橋・北豊橋・竹行橋）のある三橋広場、施王廟、丁蹄作坊などのあるところが楓涇鎮の中心街になっている。肖氏によると運河は500～600年前につくられたものだという。建物は100年前の、清朝末期のものである。紙銭を売っている店があり、肉屋がある。道教の寺院である施王廟に祀られているのは施全（死後靖江王とされる）で、「民族英雄」とされる岳飛の部下である。岳飛を殺した秦檜（1090～1155）は金との講和を推進した南宋の宰相であるが、その秦檜を暗殺しようとして失敗し、磔に処されたのが施全である。神として祀られる施は、街を守り、地元の商業を繁栄させる存在となっている。道教は古代の民間信仰を基盤に不老不死・現世利益を目的に自然発生的に生まれたが、やがて老子を教祖とするという考えが主張されるようになった。唐の時代になると道教は王室と結びついて勢力が急激に伸長した。というのは、老子の正式名が李耳で、唐王朝の皇帝の姓と同じであるという理由による。道教寺院である「廟（神仏を祀る宗教施設）」とは別に死者を祀る宗教施設である「廟」がある。中国においては「廟」は祖先の霊を祀る場ではあっても、墓所ではない。墓所は別に存在し、ここでも墓地は施王廟とは別の場所にある。丁蹄作坊（入場料5元）には豚のもも肉の醤油煮込みをつくる昔の工程が蠟人形で展示され、道具類も展示されている。ここは展示館になっており、150年の歴史のある豚肉料理の加工場は別のところにある。昔の工程では、黒豚を切り分けた肉を水できれいに洗い、毛を抜いて鍋に入れ、調味料を入れて何時間も煮込んだものを包装した、という。丁蹄作坊の2階には、日本兵が来て火をつけている絵があった。

楓涇古鎮から金山農民画村までは3km（車で10分）ほどである。農民画村は個別のアトリエ兼展示場兼販売所の建物が集中している場所である。農民画は農民が田舎の風景を描いた絵であるが、「大人の塗り絵」の感がある。16人ほどの農民画家が制作・展示・販売をしているこの場所は2006年にオープンした。正式名称は「金山農民生態休閒園」というらしい。農民画の歴史は1950年代まで遡る。当時、陝西省で始まった農業振興を目的としたポスターに起源があり、農民画指導員が各地に派遣されたため中国の各地に農民画村はある。プロではなく、農民が雨のときに描くというものであった。中洪村の金山には呉彫章が派遣されて指導し

た。彼は金山農民画の生みの親と言われている。農民画の手法はテーマを決めて下絵を描き、下絵の上に薄い紙を置いて着色する。厚みを出すために、着色した絵の下に薄い2枚の和紙のような紙を糊付けする。18歳のときから描いているという、農民画伝承者の曹秀文さんの工房では額に入った小さな絵を100円で売っていた。額に入れていないのは90元だという。

X. おわりに

今中国では軍隊は法的には徴兵制を採用しているが、志願者だけで定員が満たされるので事実上志願制になっている。ただし、学校教育における軍事教練が義務づけられている。訓練期間は中学校が1週間前後、高校が1~2週間、大学が半月~1か月程度、入学直後に行われるのが一般的である。学校内で、男女共に整列や行進の訓練をし、大学では実弾の射撃訓練もある（予算と場所の関係で大学によって異なり、やらないところもあるらしい）。

個人所得税の課税最低限を月収2000元から月収3000元に引き上げた。また、地級市（地区クラスの市のこと）には市直轄区が設置されるのが一般的である。ところが、市直轄区とは別に「工業園區」なども設定させていれるらしい。工業園區は、経済が発展しているところである。ガイドの肖氏は4年前に大学の日本語科を卒業した。漫画が好きで、今も「ワンピース」が好きだとのこと。一衣帯水の隣国である中国には興味深い事柄が多々ある。今後もより深く中国について知りたいと思うのである。